



福島県

特定非営利活動法人 アクセスホームさくら  
理事長 渡邊 幸江さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原  
取材日：2月3日

大切な仲間と共に“さくら”頑張っています！

利用者さんの声を聴き「やっぱり“さくら”は、なくせない」という強い気持ちを持って、避難先の二本松市で事業を再開したアクセスホームさくら。自立支援を理念に、明るさ・優しさ・本音でいられる大事な居場所になっています。



▲二本松市内に再開した新事業所にて



▲利用者の皆さんと一緒に

障がいがある方の中での居場所づくりをと、浪江町手をつなぐ親の会が母体となってアクセスホームさくらが設立されたのは、平成13年4月でした。それから10年経った震災。私はいわきに出張して電話がつかない津波が来るからみんなを送迎しないで！と、祈りながら6時間かけて戻りました。事業所では、利用者さんの中に請戸の方がいるから送迎はできない、保護者が来るのを待とうと判断し、絶対迎えが来るからね！と、励ましていたそうです。夜は帰れなかった利用者さんと職員で車中に泊まりました。翌日、着の身着のまま津島

た。そのため、一回目の爆発の時、すでに二本松。ガソリンがないピンチのお蔭でした。磐梯熱海に宿が取れ2泊はしましたが、20人程の大部帯ではこの先動けないと判断して、いったんバラバラに避難しようと決めました。職員で福島を避難先にしたのは2人だけでしたが、利用者さんの安否確認ができてから、県内外の避難先を回れるだけ回りました。「みんなに会いたい」「もう一度手話をやりたい」そんな声を聴いて、やっぱりさくらには、なくせない、目標を持って今まで積み上げてきた一人ひとりの課題をだめにしたく

小学校の体育館に避難しましたが、車のガソリンが少なくて不安を抱えての移動でした。何かあった時にガソリンがなくはないと思いついて、その日のうちに中通りに向かいまして。そのための爆発の時、すでに二本松。ガソリンがないピンチのお蔭でした。磐梯熱海に宿が取れ2泊はしましたが、20人程の大部帯ではこの先動けないと判断して、いったんバラバラに避難しようと決めました。職員で福島を避難先にしたのは2人だけでしたが、利用者さんの安否確認ができてから、県内外の避難先を回れるだけ回りました。「みんなに会いたい」「もう一度手話をやりたい」そんな声を聴いて、やっぱりさくらには、なくせない、目標を持って今まで積み上げてきた一人ひとりの課題をだめにしたく

小学校の体育館に避難しましたが、車のガソリンが少なくて不安を抱えての移動でした。何かあった時にガソリンがなくはないと思いついて、その日のうちに中通りに向かいまして。そのための爆発の時、すでに二本松。ガソリンがないピンチのお蔭でした。磐梯熱海に宿が取れ2泊はしましたが、20人程の大部帯ではこの先動けないと判断して、いったんバラバラに避難しようと決めました。職員で福島を避難先にしたのは2人だけでしたが、利用者さんの安否確認ができてから、県内外の避難先を回れるだけ回りました。「みんなに会いたい」「もう一度手話をやりたい」そんな声を聴いて、やっぱりさくらには、なくせない、目標を持って今まで積み上げてきた一人ひとりの課題をだめにしたく

# 浪江のこころ通信

・第57号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第57号」への感想をお寄せください。  
【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





## 吉本 和夫さん・和枝さん(請戸)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木  
取材日：1月24日

### いわき いいところ 元気に にこやかに

息子さんご夫婦とお孫さんと6人で、賑やかに暮らしておられる吉本さんご夫妻。愛犬くるみちゃんと一緒に気候のよいいわき市にお住まいです。ワンちゃん好きのご近所さんとのつながりは、くるみちゃんがお散歩で一役かっているとのこと。同居しているお孫さんを見守りながら、地域デビューの日を楽しみに元気に過ごしておられる毎日です。



▲リビングでひなたぼっこ。愛犬くるみちゃんと一緒に。

◆**早めの行動が功を奏して**  
私たちは、はじめ川俣高校の体育館に避難しました。けれども寒くて寒くていられたなかったので、13日の朝には出かけて、真っすぐいわきに行っただけです。たまたまガソリンも満タンに入れていたし、息子の会社がいわきでこちらに住んでいたのですね。それから半月位でアパートを借りました。少し落ち着いた頃、家はもう津波でないので土地を探し始めました。

◆**5年たつてそれなりに進んでいる**  
向こうにいたころは自分の畑とかあったので、手入れとかしなくちゃならなかったから、そこそこ時間が潰れていた

◆**ここはすごいんですよ**  
ここにはね、2013年の7月に息子夫婦が先に住んで、私たちは8月に同居しました。結構見晴らしがよくて、夏は涼しいし、海も近くて見えるんですよ。花火もよく見えるし、四季折々いいところ。しいて言えば、風が強いくらい。元々浜に住んでいたからこういう気候は慣れてい

◆**あれはいいよ、タブレットは！**  
それなりに使っています。町の情報やメールとかくるじゃないですか、便利です。あとはなみえ新聞のところ、みんな写真アップしているからね。ああいうのはいいですよ。懐かしいっていうか、あれで大分みんなの様子が変わりますね。情報制限っていうか上限があります。情報が、あれ撤廃してくれるとなおいいかな(笑)。



## 清水 日出男さん(川添)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原  
取材日：2月5日

### みんなに言いたい “帰りましょうよ！ 浪江町、無くなるよ”



二本松市の仮設住宅で避難生活を送っている清水さん。震災前から勤めている一樹デイサービスセンターで現在も仕事を続けています。「解除になったらすぐに帰る。とにかく、帰りたい一心でいるから」と、思いを語られました。

◆**仕事のこと**  
朝6時にセンターを開けて、まきストープで部屋を暖めて掃除をする。施設の修繕とか細々としたことを一手に引き受けてやっているから忙しいよ。それから、本宮と杉内のそれぞれで7反の畑にいろいろ作っているけど、土が良くなくて売れるものはでき

◆**家族のこと**  
妻は週2回、センターでおしゃべりとか楽しんでます。娘はセンターの設立からのメンバーで、一言でいうと、よくやっています。毎日朝6時半に家を出て原町と浪江に通っています。大変だから原町に住まいを借りたらと言っても、お父さんとお母さんを2人にしておけないから、って。親孝行過ぎますね。子ども3人、孫4人に恵まれて幸せだよ。

◆**体調のこと・思い**  
去年、仕事で浪江に行った時、気持ちが塞いでしまい本当に辛くて、高瀬川に架かる橋から飛び込みたい衝動に駆られました。でも、そんなことをしたら、家族に負担がかかると思います。とどまりました。そのあと、体調を崩して入院。イライラして、気を揉んでだめなんだ。今は、なんぼか良くなったけど、薬で生活しようかなもんだ。楽しみになんて考えない。早く浪江に帰りたい。解除になったらすぐ帰る。精神的に参っているから、帰りたい一心でいるから。補償金は、孫・ひ孫の代まで崇ってくる。私ら、お金の問題でなく、早く帰れることを考えてもらわないと。このまましていると、置き去りにされちゃうよ。店や病院は、原町やいわきに行けばあるから、何でも揃わなきゃだめってことはない。とにかく、解除になったら帰ると決意している。みんなに言いたい、帰りましょうよ。